Academic Monographs on
Foreign Languages and Literature

外国语言文学学术论丛

# 近代日本知识分子的中国革命论

钱昕怡/著

近代日本の知識人と
中国ナショナリズムの展開

中国人民大学出版社

外国语言文学学术论丛

# 近代日本知识分子的中国革命论

钱昕怡　著

中国人民大学出版社

**图书在版编目（CIP）数据**

近代日本知识分子的中国革命论/钱昕怡著
北京：中国人民大学出版社，2007
（外国语言文学学术论丛）
ISBN 978-7-300-08581-4

Ⅰ.近…
Ⅱ.钱…
Ⅲ.中国-近代史-研究-1901~1911
Ⅳ.K257.07

中国版本图书馆CIP数据核字（2007）第153489号

外国语言文学学术论丛
**近代日本知识分子的中国革命论**
钱昕怡　著

| | | | |
|---|---|---|---|
| 出版发行 | 中国人民大学出版社 | | |
| 社　址 | 北京中关村大街31号 | 邮政编码 | 100080 |
| 电　话 | 010-62511242（总编室） | | 010-62511398（质管部） |
| | 010-82501766（邮购部） | | 010-62514148（门市部） |
| | 010-62515195（发行公司） | | 010-62515275（盗版举报） |
| 网　址 | http:// www. crup. com. cn | | |
| | http:// www. ttrnet. com（人大教研网） | | |
| 经　销 | 新华书店 | | |
| 印　刷 | 北京鑫丰华彩印有限公司 | | |
| 规　格 | 140 mm × 202 mm 32开本 | 版　次 | 2007年6月第1版 |
| 印　张 | 6.75 | 印　次 | 2007年6月第1次印刷 |
| 字　数 | 189 000 | 定　价 | 26.00元 |


**版权所有　侵权必究　印装差错　负责调换**

# 前　言

如果将以建设国民国家（或民族国家）为目标的意识形态及其运动大致概括为民族主义（nationalism）的话，近代中日两国的关系史在某种意义上可以说是彼此的民族主义相互对抗、连动的历史。

首先，从两国民族主义发生的背景来看。19世纪中期，“黑船”的到来打破了江户幕府长期的锁国政策。面对来自欧美列强的压力，日本企图尽快实现近代化，在对近邻的“大清国”保持警惕并与其对抗的同时，致力于国民国家的形成。其结果却给中国带来了“日本冲击波”，促进了中国建设国民国家的进程。对于近代中国来说，“日本冲击波”有双重含意。一是日本的兴起所带来的刺激。通过明治维新，日本成为亚洲最早的西方式近代国家。而中国真正开始国民国家建设是在甲午战败之后。另一层含意指的是，日本一跃成为帝国主义列强的一员，积极地开展亚洲侵略所带来的冲击。可以说，是以日本帝国主义为首的列强对中国的侵略唤起了大多数对国事漠不关心的中国民众的民族自觉性，为中国民族主义运动的展开奠定了基础。

“日本冲击波”这一视点很好地把握了近代日本的民族主义对中国的民族主义形成所带来的影响。但是，反过来看，中国的民族主义又对近代日本的民族主义有何影响呢？从辛亥革命到五四运动、国民革命，中国的民族主义运动进程本身对日本积极

企图加入的帝国主义国家秩序构成了强大的挑战。难道真的如一些日本学者所认为的那样，对近代日本来说，模仿西方列强走侵略亚洲的道路是当时唯一的选择吗？为了从更多元的角度汲取近代中日关系史上的多种可能性，我们有必要进一步深入考察近代日本与中国的民族主义运动之间存在的相互牵制、相互影响的关系。

作为一个切入点，本书将从考察中国的民族主义运动对日本的“冲击”的角度，聚焦日本从大正民主主义到昭和超国家主义的转折时期，以辛亥革命至国民革命期间为中心，具体考察近代日本的知识分子对中国民族主义及其运动的各种看法。

基于以上的问题意识，本书将分别以这一转折时期并存的民主主义、社会主义、自由主义思潮的代表人物——大隈重信、永井柳太郎、吉野作造、堺利彦、山川均、长谷川如是闲等知识分子作为研究对象，分析他们的中国革命论。本书以当时出版的《新日本》、《新社会》、《中央公论》、《改造》以及《我等》等杂志作为第一手资料，不拘泥于个别的人物研究，试图在更广阔的背景中对人与时代的关系进行多方面的考察。本书的构成如下：

第一章——杂志《新日本》的中国革命论——主要考察杂志《新日本》上发表的大隈重信和永井柳太郎有关中国问题的评论，分析辛亥革命至护国战争期间的日本论坛对中国革命的基本认识。在19世纪后半期“西力东渐”的严峻的国际环境中，一跃成为帝国主义列强一员的“新日本”不仅面对着中国、朝鲜等亚洲国家的排日运动，还要面对在欧美各国掀起的排日运动。处在这两个排日运动的夹缝当中，如何确立所谓“世界中的日本”的民族自我认同（national identity）成为当时的外交论的中心课题。对中国革命的评价也正是在这样的前提下展开的。这一章将《新日本》上发表的大隈、永井等人的中国革命论与“文明论”、“同文同种论”等结合在一起考察，试图解明近代日本自我认同意识所具有的精神构造。

第二章——吉野作造的日中提携论——关注大正民主主义



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

者吉野作造的“日中提携论”。因为吉野曾积极地评价并支持中国的民族主义运动，所以有的日本学者誉其为“反帝国主义者”。但需要留意的是，吉野在对中国革命运动的动向表示关心，提出“日中提携”的主张的同时，也主张不遗余力地维护日本在中国的“特殊权益”。这一章考察了吉野的日中提携论从第一次世界大战到国民革命时期，形成、嬗变的过程。五四时期，在吉野的倡导下，日本的思想团体“黎明会”、“新人会”与李大钊等中国的新知识分子之间曾有过短暂的交流活动。为了检讨这一中日交流运动之所以在短时间内中断的原因及当时的思想状况，李大钊及其周边的新青年的思想状况也被纳入考察比较的范围。作为在五四运动、华盛顿体制成立以及国民革命等历史关头摸索在与中国的民族主义运动相提携的同时，又能维护日本的国家利益的可能性的一种议论，本章重新探讨了吉野的中国论所具有的思想史意义。

第三章——大正时期社会主义思想中的“阶级”与民族主义问题——以“阶级”这一视点为中心，把经历了“寒冬时代”之后仍坚守“正统社会主义旗帜”的堺利彦作为研究对象，探讨大正社会主义者对中国革命的认识。因为强调“阶级”的观点，所以一般认为日本的社会主义者对亚洲各国的民族主义普遍缺乏内在的关心。但是在具体的历史状况下，“阶级”的视点和民族主义又有何内在的联系呢？本章通过检讨杂志《新社会》上发表的有关辛亥革命、第一次世界大战以及在日中国人、朝鲜人劳工问题的评论，来分析堺对“国家”、“民族”、“阶级”等问题的思想认识。

第四章——长谷川如是闲在20世纪20年代的中国革命论——以对如是闲的中国论的分析为中心，考察通过对“社会的发现”而获得将国家相对化视点的近代日本的知识分子是如何看待同时代的既是资产阶级革命、民族解放运动又具有社会变革意义的中国民族主义运动的。在以“社会的发现”为特征的20世纪20年代的思想背景下，以往局限于狭义的国家与国家间关系的国际关系为“社会的连带”精神所触发，产生了提起新的认识框架的可能性。作为一个个案研究，本章以从“多元国家论”的

立场出发主张“国家的社会化”的《我等》时代的如是闲为研究对象，通过考察其有关中国的近代国家建设问题和对中国政策的评论，解读如是闲的中国革命论的理论结构及其背后的认识轨迹，重新审视“社会的发现”这一思想状况对近代日本的中国认识所具有的意义。

通过以上各章的考察，我们可以确认近代日本的知识分子是围绕着东方与西方、“民本主义”和民族主义、“阶级”与民族主义、历史发展阶段论等主题，来试图理解中国的民族主义问题的。吉野、山川以及永井、如是闲等人从民本主义、社会主义、自由主义等各自的思想立场积极评价中国的民族主义运动所具有的意义，对拘泥于落后时代的武力主义、领土扩张主义的日本帝国主义政策进行了批判。但是，如笔者在各章的分析中所指出的那样，由于他们肩负着东方与西方、“民本主义”与民族主义等“二律背反”的思想课题，可以说他们的帝国主义批判并没有否定帝国主义本身，而是在如何改造日本帝国主义现状的维度上展开的。堺和山川等社会主义者的议论在这点上的立场有所不同，但他们对中国革命运动所持有的优越意识，显然源自他们对日本处在资本主义的最高阶段即帝国主义阶段的认识。正是以帝国主义这一历史阶段的必然性为默认的前提的知识分子的言说空间，封闭了近代日本的民族主义所有的不同价值取向的可能性。对于“为了对抗来自欧美的压力，日本走上侵略和殖民地扩张的道路是当时唯一的选择”这一日本历史研究界普遍存在的思维定式，如果不勇敢地进行质疑和突破，就不可能对近代日本与中国民族主义的关系进行有效的批判。

随着近年来中国经济的快速发展，在一直把中国视为“无法忘却的他者”的日本看来，中国“大国化”、“强国化”的可能性比甲午战争之后的任何一个时期都要切实。处于21世纪新的转折时期的日本再次面临着如何接受中国的民族主义“冲击”的问题。而另一方面，以“中华民族的伟大复兴”为国家建设目标的中国，如何摆脱具有排外性质的民族主义的束缚也引人注目。与本书中考察的时期相比，虽然围绕中日两国的国内外的政治经济状况有了很大变化，但是在探讨当代的中日两国民族主义关系的

时候，围绕民族主义所展开的吉野等知识分子的思考依然不失其警示意义。

本书的底稿是笔者于2005年3月向日本京都同志社大学大学院提交的博士学位（政治学）论文。其中第一章、第三章、第四章的初稿曾先后发表在同志社大学的学报《同志社法学》第54卷第1号（2002年5月）、第55卷第3号（2003年9月）和第56卷第7号（2005年3月）上。

自1996年开始近代日本政治思想史的学习和研究以来，转眼已过十年。也曾“少年意气”地立志“十年磨一剑”，然而治学之路愈行愈知“学无止境”，自己的这把“剑”还只是刚刚铸成了“型”而已。借笔者所供职的中国人民大学外国语学院出版学术丛书之机，鼓足勇气把拙论以日文原文的形式在国内出版。对于出版，笔者有两点初衷：一，总结过去的研究成果向父老乡亲做一个汇报，望得到各位日本学研究同仁的批评指教，以激励自己继续前行；二，笔者一直认为，除了福泽谕吉等个别的思想家之外，中国学界对日本近代知识分子的思想的了解和研究还远远不够。本书采用了20世纪10～30年代日本论坛大量的第一手资料，希望能够在促进中日思想交流、帮助日本学研究者收集资料等方面发挥些许作用。

最后，谨向笔者的指导教授西田毅先生，以及十年来给予笔者无数关怀和指导的各位老师致以衷心的感谢，还有与笔者在同志社的“博远馆”一起上课、学习、参加研究会的各位学长和同学们。大家一心向学、刻苦钻研的精神，以及由此形成的良好学术交流氛围，让笔者受益匪浅。可以说，没有各位师长和同学的指教和鞭策，就没有本书。他们中既有中国人，也有日本人，篇幅所限，恕笔者不能一一列举他们的名字。在某种意义上，本书自身就是一个中日思想交流的成果。在此，对出版拙著的中国人民大学出版社外语分社也致以最诚挚的谢意。

2007年5月

**于人民大学青年公寓**

# 凡　例

（一）引用文の仮名づかいは原文のままとしたが、漢字は基本的に当用漢字に改めた。

例：「社會」——→「社会」

（二）引用文における〔　〕内は、引用者による。引用文の（　）内は原注である。

（三）引用文中の……は、引用者による省略を意味する。

（四）引用に際して、原則としてふりがなは省略した。ただ、読みにくい語には原著のふりがなを再現するとともに、適宜引用者による新たなふりがなを付した。

（五）本文における「満州」「満蒙」「満州事変」などの固有名詞は便宜上日本歴史学界の通説に従い、筆者の観点を示すものではない。「満州」は中国の東北地方、「満蒙」は東北地方と内蒙古の一部のことであり、「満州事変」は中国で「九・一八事変」と呼ばれている。

# 目　次

**序章　近代日本と中国ナショナリズムの形成**……1
**第一章　雑誌『　新日本』にあらわれた中国革命論**
——辛亥革命から第三革命期にかけて……9
第一節　雑誌『新日本』について……9
第二節　大隈重信の「文明論」と中国認識……14
一　辛亥革命論……14
二　日本の使命……19
三　「文化的膨張論」……22
四　大隈の「文明論」の破綻……25
第三節　「新日本」と「新支那」……30
一　共和制か帝政か……30
二　「対支政策」
——永井柳太郎の「経済的外交」論を中心に……34
三　革命の将来……42
四　中国革命青年の声……44
第四節　小括——「精神的信任」なき「日支提携」論の位相……46
**第二章　吉野作造の日中提携論**
——第一次世界大戦から国民革命期にかけて……53
第一節　問題の所在……53

第二節　中国の「自強化」
——吉野作造の対中国政策の長期戦略 ……57
一　吉野の「日本人教習」時代 ……57
二　中国の「自強化」策——対中国政策の長期戦略……60
三　中国の革命運動について……64
第三節　吉野における「日支親善論」の展開……67
一　日本の「大陸発展形式」の転換 ……67
二　日中の精神的「提携」 ……71
第四節　大戦後日中知識人の「黎明運動」の
思想的基盤についての考察
——吉野と李大釗・北京大学学生訪日団 ……73
一　帝国主義から国際民主主義へ……73
二　李大釗の「世界の大勢」観 ……76
三　北京大学学生訪日団(1920)に関する思想的考察……79
第五節　吉野の日中提携論の限界
——ワシントン体制と国民革命の狭間において ……85
一　ワシントン体制への順応と吉野の中国統一
国家構想 ……85
二　吉野の日中提携論の到達点
——国民革命を経過して ……90
第六節　小括——吉野の日中提携論の思想史的位置 ……94
**第三章　大正期社会主義思想における「階級」とナショナリズムの問題**
——堺利彦と雑誌『新社会』を中心に ……97
第一節　大正期社会主義という問題状況 ……97
一　問題の所在 ……97
二　堺利彦と雑誌『新社会』 ……100
第二節　「国家戦と階級戦」
——第一次世界大戦をめぐって ……103
一　国際闘争(国家間闘争)か階級闘争か
——国家観をめぐる堺と愛山の相克……103



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二　愛国心
——欧州社会党の「変節」問題をめぐって ……113
第三節　「階級」という視座の陥穽……117
一　辛亥革命論 ……117
二　「日本の『日米問題』」 ……122
三　堺と「大正デモクラシー」 ……125
第四節　小括——「階級」とナショナリズムのあいだ ……129
**第四章　1920年代における長谷川如是閑の中国革命論** ……135
第一節　問題の所在 ……135
第二節　如是閑における中国への問題関心と
その中国論の展開 ……140
一　「ラッセルの社会思想と支那」(1920)
——如是閑の最初の本格的中国論 ……140
二　如是閑の中国論と1920年代の思想状況 ……145
第三節　如是閑と中国ナショナリズム
——国民革命の進展をめぐって ……148
一　中国革命の進むべき道
——「二元社会」という中華民国の現状から ……148
二　「労資の対立と民族的対立」
——五・三〇運動事件 ……152
三　北伐と急進的な共産主義運動に対する
如是閑の懐疑 ……157
四　南京政府の関内統一について ……161
第四節　中国の資本主義化と対中国政策の転換 ……166
一　日本の帝国主義政策批判
——済南事件を中心に ……166
二　如是閑の「満州放棄論」
——満州事変を目前にして ……169
第五節　小括——如是閑の中国革命論における
二元論的構造とその思想史的意味 ……172
**終章　アポリアとしてのナショナリズム** ……176

**参考文献** ……181

# 序章　近代日本と中国ナショナリズムの形成

「近代」史を省察するとき、まぎれもなく大きなテーマとなるナショナリズム(Nationalism)に関して、「民族主義」、「国家主義」、「国民主義」など、さまざまな訳語が存在するが、それらの概念の一義的な定義はなかなか成り立ちにくい。国家主権の確立、国民国家(Nation)の建設をめざすイデオロギー及び運動をおおまかにナショナリズム①として概括すれば、近代における日中両国の関係史は、ある意味で相互のナショナリズムを軸に連動し、拮抗してきた歴史にほかならないといえよう。

---

① 「逆説的ではあるが、ナショナリズムについて一義的な規定が成り立ちにくいところに、ナショナリズムの本質があると言える」(姜尚中「ナショナリズム」、廣松渉ら編『岩波哲学・思想事典』岩波書店、1998年、1199頁)という指摘もあるように、ナショナリズムは、多義的な概念である。ナショナリズムについての今日的関心の高さを反映して、ナショナリズムに関する論考は、政治学、哲学のほか、社会学、歴史学、社会言語学、カルチュラル・スタディーズ、文学研究など非常に多くの分野にわたっている。それぞれ啓発されるところは大きいが、ここでは、「ナショナリズム」という概念は主に「あるネーションの統一、独立、発展を志向し押し進めるイデオロギー及び運動」(「ナショナリズム・軍国主義・ファシズム」、『丸山真男集』第6巻所収、岩波書店、1995年、303頁。初出は『現代政治の思想と行動(下)』未来社、1957年)という古典的なナショナリズムの定義に依拠していることを断っておきたい。この定義によって、「中国ナショナリズム」という場合、近代中国が国民国家の形成過程において抱えた「民主・平和・統一及び富強」といった国内の社会経済的課題も検討の対象となるべきだろうが、本書では近代日中関係史の視角から、対外独立と国家統一をめざす民族独立運動としての「中国ナショナリズム」の意味を重要視している。

フランス革命以降の19世紀の西洋世界に歴史的起源をもつ、国民国家を構成単位とする近代の国際秩序に、同じく非西洋世界の「後進国」として引き入れられながら、日本と中国のナショナリズムは対蹠的な構造をもっていた。すなわち、日本は明治維新後、西洋の帝国主義列強の植民地支配を蒙らずにいちはやく西洋モデルの近代国家を樹立することに成功し、日清・日露両戦争を経て欧米とならぶ列強勢力としてアジア諸国を侵略し、「大日本帝国」へと膨張する。しかし中国はほかのアジア諸民族と同じように、国民国家形成の方向に歩み出す以前に、日本を含む帝国主義列強の侵略を蒙り、植民地ないし半植民地の境遇に陥る。そして、国民国家の創生を意味するナショナリズムは中国において民族解放運動の形態をとって、帝国主義列強の侵略に対する抵抗の中から台頭してきたのである。ここでは、日中両国のナショナリズムの発展形態に見られる「侵略—抵抗」というような質的な差より、近代日本と中国ナショナリズムの間に存する相互規定的なあり方に注目したい。[①]つまり、日本帝国主義との対決のなかで中国のナショナリズム運動が展開されたとすれば、日本帝国主義支配体制の確立も中国や朝鮮などのアジア・ナショナリズムとの対決のなかで行われたということの意味を理解したいと考える。

すでに多くの論者によって指摘されているように、中国ナショナリズムの形成を促進した契機として、「西洋の衝撃」とならんで、「日本の衝撃」は特に大きかったといえる。[②]近代中国にとって、「日本の衝撃」は二重の意味をもっている。一つは、いちはやく西洋型の近代国家を作り上げた日本の勃興がもたらした刺激である。中国が国民国家形成に向けて本格的に動き始めたのも、日清戦争の敗戦を喫してからであ

---

① 浅田喬二『日本知識人の植民地認識』(校倉書房、1985年、313～315頁)、茂木敏夫「日中関係史という枠組」(『歴史評論』638号、2003年9月)を参照。また、近代日本と中国の相互規定的なあり方を複眼的に捉えることが求められているとして、思想連鎖という視角を提示した、山室信一の研究『思想課題としてのアジア 基軸・連鎖・投企』(岩波書店、2001年)が示唆に富む。

② このような「日本の衝撃」の意味については、主に山室前掲『思想課題としてのアジア 基軸・連鎖・投企』(145～154頁)を参照した。

る。[1]康有為らの変法運動をはじめとして、清末以降日本を参考とした改革論が多くの中国知識人によって唱えられるようになった。日清・日露両戦争における日本の勝利を明治維新以来の改革の成果として捉えた結果、文化摂取の面でそれまでずっと「師」だった中国は日本に学ぶようになり、多くの熱血青年は救国救民の真理を求めるため日本に渡ったのである。中国各地から留学生が集まり、愛国運動・革命運動の発信源となったことから、20世紀初頭の東京は中国革命の策源地として位置づけることができよう。民主主義、民族主義、社会主義、無政府主義といった思潮の受容にあたって、近代中国にとって日本は「外来知」の供給者としても大きな役割を果たしたのである。

もう一つの「日本の衝撃」は、日本が帝国主義列強の一員となり、アジア侵略の先兵となったことである。1905年5月の日本海海戦の直後、スエズ運河の航海中に日本の勝利の報に接したアラビア人たちの興奮をみた孫文が、「日本がロシアに勝利した結果として、アジア民族の独立という大きな希望が生まれた」[2]と語ったことはよく知られている。しかし、このようなアジアの植民地解放の先兵という日本への期待はすぐ裏切られた。帝国主義日本をはじめとする列強の勢力拡張が、それまで国家に対してほとんど無関心であった中国民衆の民族的自覚を喚起し、ナショナリズムの基盤を醸成したといえる。中国ナショナリズムは、その発生当初から反日本帝国主義を主要内容とするものであった。

「日本の衝撃」という視点は、確かに、近代日本のナショナリズムが中国ナショナリズムの形成に及ぼした影響をよく捉えていると思われる。しかし、逆に中国ナショナリズムは近代日本にどんな「衝撃」をもたらしたのであろうか。両国のナショナリズムの発生事情からみれば、日本が欧米の圧力とともに清朝に警戒と脅威感を抱き、それと対抗しつつ国民国家

---

① 村田雄二郎「中国のナショナリズムと近代日本」(毛利和子・張蘊嶺編『日中関係をどう構築するか』所収、岩波書店、2004年)を参照。村田によると、近代中国がナショナリズムに目覚めるのは日本との否定的な関係を通じてであったといってもよい。その否定的な関係とは、いうまでもなく日清戦争(甲午戦争)の敗北によって、朝野に次第にナショナルな危機意識が芽生え、そこから国民形成への胎動が始まったことをさす(72頁)。

② 孫文「大アジア主義」(1924年、陳徳仁・安井三吉編『孫文・講演〈大アジア主義〉資料集』所収、法律文化社、1989年)。

の形成を行った[①]結果、逆に中国に「日本の衝撃」をもたらし、その国民国家形成を促したといえる。本居宣長などの国学者の議論が典型的であるように、江戸時代以降、日本が自国中心の観念を獲得していく過程において、隣の清朝(中国)という大国の存在はつねに意識される対象であった。[②]「日本がいちはやく欧米を模範に国民国家形成を進めたのは、中国や朝鮮からの衝撃に先手を打って有効に対抗していくためであった」[③]という議論が妥当とすれば、実際に中国が国民国家形成の競争から落伍し、日本帝国主義にとって利権拡張の最大の対象となった時、日本は自国の侵略に立ち向かう中国民衆の抵抗ナショナリズムのエネルギーをどのように受け止めていたのだろうか。

辛亥革命から五・四運動、国民革命へと続く中国ナショナリズムの進展自体は、日本が積極的に参入しようとしていた帝国主義的国際秩序に対する強大な挑戦として位置づけられる。[④]たとえば、中国ナショナリズムの発展を受け止めて、日本の論壇においていちはやく孫文らの南方革命派が将来の中国の中心勢力となると指摘した吉野作造は、1919年に次のように訴えている。「支那は確かに覚めつゝある。惰眠を貪る時は、兎も亀に追ひ越さるゝことがある。読者願はくは隣邦近時の内面的発展の大勢に注意せられんことを」。[⑤]日本=「兎」、中国=「亀」としたその訴えには、中国のナショナリズム運動に対するある種の危機感が強く感じられる。このような中国ナショナリズムの「衝撃」を近代日本の知識人は実際にどのように受け止めたのか。西洋列強を摸倣したアジア侵略への道は近代日本にとって本当に唯一の選択肢であったのか。近代の日

---

① いわゆる中華帝国に対する日本の強い対抗意識の存在については、三谷博「第一章『プロト国民国家』の形成——比較史の見地から」『明治維新とナショナリズム——幕末の外交と政治変動』(山川出版社、1997年)を参照。近代以来の中国蔑視や近年しばしばメディアに煽りたてられる「中国脅威論」の背後には、一貫して中国という強大な「他者」への畏怖を看取できるであろう。

② 子安宣邦『本居宣長』(岩波書店、1992年)、渡辺浩『東アジアの王権と思想』(東京大学出版会、1997年)などを参照。

③ 山室、前掲『思想課題としてのアジア 基軸・連鎖・投企』、149頁。

④ 和田守「大正思想史とアジア・ナショナリズム」(『日本思想史学』第35号、2003年、18～19頁)を参照。

⑤ 吉野作造「果して理想派の凋落か」『中央公論』1919年9月、222頁。

中関係史におけるアンビヴァレントな可能性をより多角的に汲み上げるためにも、近代日本と中国のナショナリズムの間に存する相互規定的なあり方をより複眼的に捉える必要があろう。

一つの接近方法として、本書では、上述のような近代日本に対する中国ナショナリズムの「衝撃」[①]の意味を問う視点から、「大正デモクラシー」の時代から昭和の超国家主義に移行する、いわゆる近代日本の転換期に照明をあて、辛亥革命から国民革命期を中心に、近代日本の知識人における中国ナショナリズム論の実相を具体的に考察したい。

第一次世界大戦末期からその直後において、日本は国際的には対英米協調と中国内政不干渉を中心とする国際的な平和協調路線をおしすすめ、内政上も原内閣の成立によって従来の藩閥政治から政党政治体制に大きくその方向を転換した。しかし、世界恐慌が深刻化する1930年前後から、そのような外交上内政上の方向性はやがて超国家主義、そして総動員体制へと移行していく。[②]日中関係史に即していえば、1910年代から1930年初頭にかけてのこの転換期はちょうど辛亥革命から満州事変(九・一八事変)にかけての二十年にあたる。注目されることに、この時期に展開された大正デモクラシー運動と中国革命の間に、一種の同時代的波動を見ることができる。[③]政治史的にいえば、大正デモクラシーは、1912年の大正政変(第一次護憲運動)と、1918年の米騒

---

① 溝口雄三は、近年の日本の産業空洞化現象などを踏まえて、東アジアでは経済関係を中心に「環中国圏」の枠組が浮上することを想定し、日本がその経済関係構造の中に周辺化されつつあるにもかかわらず、大半の日本人がいまなお「遅れた」中国という明治時代以来の偏見から脱出していないことを「中国の衝撃」と表現している。かれによると、「脱亜」した近代日本(及びそのモデルとなった近代西洋)を「先進」と捉える西洋中心主義的な歴史観を覆す要素をもつ「中国の衝撃」という論点の強調は、蔑視の裏返しで世界の歴史的な差別構造の産物にほかならない「中国脅威論」を説くためではなく、前世紀的な偏見からいかに脱出すべきかを前提にすべきである(「序"中国の衝撃"」『中国の衝撃』東京大学出版会、2004年)。本書で「中国ナショナリズムの衝撃」という視点の提起によって問おうとしているのが、まさに具体的な歴史状況の中で、日本の知識人が「独立自彊」する中国をいかに対等な他者として認識しようとしたかという問題である。

② 第一次世界大戦から第二次世界大戦にかけてのこの転換期における日本の政治状況などについて、川田稔『原敬 転換期の構想——国際社会と日本』(未来社、1995年)参照。

③ 野沢豊「中国革命・ロシア革命への思想的対応」(古田光ら編『近代日本社会思想史II』所収、有斐閣、1971年、40～41頁)を参照。



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com